

プログラム・ノート

片桐卓也

クァルテット・インテグラはサントリーホール室内楽アカデミーに在籍しており、国際的なコンクールで優勝するなど、いま最も勢いのある若手グループだ。彼らの演奏は、緻密かつ大胆で、常に作品の本質を掴もうという意欲に溢れ、レパートリーも古典から現代まで幅広い。

モーツァルト：弦楽四重奏曲 第15番 ニ短調 K. 421 (417b)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)の多様な作品世界の中で、弦楽四重奏曲はどんな場所を占めているのだろうか？ 10代のイタリア旅行中、1770～73年に書かれた「ミラノ四重奏曲」(全6曲)がスタートで、1773年に「ウィーン四重奏曲」(全6曲)と呼ばれる弦楽四重奏曲が書かれる。作曲当時のウィーンで弦楽四重奏曲を聴くことが貴族の間で流行しており、その世界で注目を集めたかっただけに取り組んだとも、あるいは父親が書かせたとも言われている。

しかし、そこにヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)の大きな光が現れる。1782年に出版された、いわゆる「ロシア四重奏曲」(全6曲)である。この曲集に大きな影響を受けたモーツァルトは1782年末から1785年にかけて全6曲の「ハイドン・セット」を作曲する。その第2番目にあたるのが、このニ短調 K. 421 (417b)だ。

特徴的なのは、この作品が「ニ短調」を採用していること。これはピアノ協奏曲やレクイエムでも使われた調。ある研究者の説では、「ハイドン・セット」の6曲はそれぞれモーツァルト自身のオペラに関連しているそうで、この「ニ短調」は『ドン・ジョヴァンニ』と深い関連性を持つことになる。

第1楽章はニ短調、4分の4拍子、ソナタ形式。アレグロ・モデラートではあるが、少し悲痛な感覚を持ったメロディーで始まる。第2楽章はヘ長調、8分の6拍子、3部形式。第3楽章はニ短調のメヌエット、そして第4楽章は変奏曲形式を採る。

「ハイドン・セット」6曲はハイドンに献呈されたが、モーツァルトは自宅にハイドンを招き、この6曲を演奏したと言われており、自身はヴィオラを演奏した。

デュティユー：『夜はかくの如し』

20世紀音楽をリードしたオリヴィエ・メシアン(1908～92)、ピエール・ブレーズ(1925～2016)などの作曲家に比べ、同じフランス生まれのアンリ・デュティユー(1916～2013)は知名度の点では少し劣るかもしれないが、作品全体の凜とした佇

まい、細部まで彫琢された音の質感などへの高い評価によって、最近でも、アンネ＝ゾフィー・ムターの委嘱したヴァイオリンと管弦楽のための夜想曲『同じ和音の上に』などがよく取り上げられている。

『夜はかくの如し(Ainsi la nuit)』は1973～76年に書かれた。クーセヴィツキー財団からの委嘱作で、作曲するにあたり、デュティユーはベートーヴェン、バルトーク、そしてヴェーベルン『6つのバガテル』といった弦楽四重奏曲の先行作品を詳細に研究したという。リズム、メロディー、強弱、音色といった音楽の通常の要素だけでなく、ピッツィカート、ハーモニクス(倍音を奏する奏法)といった弦楽器特有の響きを徹底的に追究した作品でもある。

まず「イントロダクション」から始まり、「挿入句」と題された短い断章をはさみつつ、「夜想曲」「鏡で観る空間(Miroir d'espace)」「^{れんとう}連禱」「星座」、最後は「中断された時間」に至る18分ほどの作品。その親族に画家の多い家系であるデュティユーらしい色彩感に満ちた作品であり、20世紀で最も重要な弦楽四重奏曲と評価する専門家もいるほどだ。

バルトーク：弦楽四重奏曲第5番

ハンガリーを代表する作曲家ベラ・バルトーク(1881～1945)は6曲の弦楽四重奏曲を残した。第1番の作曲は1908～09年にかけて、最後の第6番は1939年の作曲であるから、ほぼ30年にわたり、この楽曲ジャンルでの探究を続けたことになる。この「第5番」は1934年の作曲で、アメリカのエリザベス・クーリッジ財団からの委嘱作である。わずか1ヶ月で書き上げられたという。

全体は5楽章で、急速なテンポの第3楽章を中心に、対称性を持つ形で作られている。アレグロの**第1楽章**は変ロ(シb)の音を中心にした第1主題を使い、再現部ではそれを反行形にするなど、シンメトリカルな構造を意識している。**第2楽章**はアダージョ・モルト。バルトークの個性を現す「夜の音楽」。静寂の中に緊張感を持ち、その中でバルトーク・ピッツィカート(指板に弦をあてる奏法)が効果をあげる。**第3楽章**はスケルツォ。ブルガリア民謡特有のリズムを使用している。冒頭のテンポ指定はヴィヴァーチェで、急速な踊りの印象を持つ。**第4楽章**は第2楽章とも深く関係を持つ主題が使われており、第2楽章の再現とも言えるような雰囲気だ。**第5楽章**は第1楽章同様、シンメトリカルな作曲技法を駆使し、全体を力強く締めくくる。

クアルテット・インテグラは、昨年バルトーク国際コンクールで優勝した際に、ファイナルでこの曲を演奏した。

(かたぎり たくや・音楽ライター)